ファッションタウン桐生「２０１１わがまち風景賞」
審査講評と審査経過

１．　審査講評

『自然との共存』

審査委員　　久保田　眞理子

自然の脅威を思い知らされた今年３月。

今回初めておとずれた黒保根の「鹿角の小集落」。地震の被害もそう大きくはなさそうだ。この山里から政治家、貿易商、インターナショナルスクールの創立者など近代化に寄与した人が出ているということには驚いた。そんなそぶりも見せず静かに自然と共存している姿は、便利なものに囲まれて住んでいる私に“もっと余裕をもって過ごしなさい“と語りかけているようだった。竹林を抜ける風がとても心地よかったのが印象にのこった。

洋風の店構えからのこぎり屋根を生かした店舗にした「ウチヤマ洋菓子店」、隣の「若宮」との同時受賞となった。５連ののこぎり屋根工場すべてが活用され、人気のお店でもある。再生される建物のよいお手本となっていると思った。これからは各店の良さだけでなく、一つの建物としての良さを出していってもらえると期待している。

このたびの地震により、建物だけでなくその中に住む人々にも大きな被害をもたらした。建物の再建と活用によって住む人や周りの人々に早く笑顔が戻ってほしいと思う。

（群馬建築士会桐生支部女性部長）

『古いものに新しい空間を付加することに感動』

審査委員　　長山　裕次郎

今回初めて参加して、普段学校と駅の間しか行き来しない自分にとって、黒保根や新里、市内の裏通りは新鮮で驚きの連続でした。古いものが残されており、古いものに新しい空間を付加したものに感動を覚えました。特にウチヤマ洋菓子店・若宮は桐生独特のノコギリ屋根工場に蔵風の玄関や白壁、新しい屋根をつけるなど斬新で古さを感じさせないデザインに心が奪われました。

今回選ばれなかった建築物にもすばらしいものが多くあったので、まだまだ桐生の魅力を見つけていただきたいと思います。

（桐生工業高等学校　建設科３年）

『２０１１わがまち風景賞』

審査委員　　小澤　正裕

今年で２回目の参加となりました。推薦案件は、昨年よりもバラエティーに富んでおり、織物産業の街という強い印象を持っていた私には新鮮でした。建造物が風景の主役という案件が多いように感じられましたが、どれも伝統を大切にしており、大変すばらしく思いました。

今年は3月１１日に起こった巨大地震による被害状況を視察しましたが、数多くの歴史的建造物の屋根瓦や壁が崩れていることが印象的でした。古い建物の脆さを感じると同時に、自然災害から建造物を守り、きれいな状態で保存していくことをより推進する必要があると思いました。また、わがまち風景賞が大切に残していくべき風景を決定するだけでなく、このようにその現状を知る、または知ってもらうという役割を担っていることを実感しました。

わがまち風景賞の現地視察および審査委員会に参加させていただきまして、昨年と同様、私が知らない桐生を知ることができました。大変勉強になりました。

（群馬大学　大学院工学研究科　博士後期課程１年）

『桐生に見る“坂の上の雲”』

審査委員　　茂木　徳造

今回も繊維産業遺産建造物を選出したが、桐生特有の良好な都市景観が一層進展するものと期待している。他にも遜色のない同類の対象案件があったが、震災の影響もあり選出できなかったことは残念。市には想定地震「群馬南東部地震」（Ｍ７）を基にした耐震改修促進計画があるが、「類聚国史」に収められている弘仁９年（８１８年）の巨大地震（山が崩れ、いくつかの里は埋まってしまい、土砂にのまれ、押しつぶされた人々は数えきれない・・云々）は想定しておくべき。新里の遺跡発掘調査でもこの地震による地割れが検出されている。新里・黒保根エリアからそれぞれ１件選出できたことは、わがまち桐生にとっての合併メリットである。新里の小池家は養蚕等、黒保根の鹿角の集落は製糸等、旧市は織物等で繁栄。域内の産業連鎖の賜であり“坂の上の雲”（理想・目標）を掴もうとする勤勉実直・質実剛健な先達を心眼で見ることができた。

（ＮＰＯ法人 新里昆虫研究会）

『桐生新町の歴史を感じて』

審査委員　　小島　良行

昨年に続き２回目の審査にさせていただき、ありがとうございました。今回入選になった「史跡の豊かな山里」「鹿角の小集落」は「わがまち風景賞」の趣旨にぴったりのすばらしい物件でした。この賞も今年は１１年目。こんなすばらしいものがある桐生に残っている事を知り、審査していて、うれしくなりました。県道６２号線の沿道５００m程の間に存在する旧養蚕農家を中心とした山里の小集落であるが、日本の政治を動かし産業振興を海外に展開する先駆者となった明治の偉人たち（新井領一郎等）が輩出され、その山里の自然の風景がそのまま残され

ており、藁葺き屋根は近代的に改装されているが、違和感もなく、この集落に愛着を持つ住民の生活もあり「わがまち風景賞」に最もふさわしい物件であった。『マルカツ＋商店ビル群』は昭和３０年頃、桐生商店連盟副理事であった川田磯次郎氏が店舗の拡張・近代化を訴え、道路幅を１８ｍに拡張して、両側に３ｍのアーケード付き歩道を設け１階の商店間の無くした横のデパートにする構想を練り実行しようとした。当初は賛同者が得られず、自分の店舗丸勝商店（現マルカツ）単独で中高層化を図り、店舗の拡張・近代化して成功を収める。その後の地道な活動により、昭和４０年から昭和４４年にかけて「桐生中央商店街」が完成する。過去１０年間の「わがまち風景賞」に選ばれた伝建群を目指している本町１・２丁目天満宮周辺の風景と見比べながら、桐生新町を散策すると、桐生新町の歴史を感じるオモシロイまちなみになってきました。

（一般応募）

『審査で感じた評価視点の変化』

審査委員　　川池　三男

今までの「わがまち風景賞」の審査を分析したとき、建造物が多く選ばれていたように思われる。その理由は、桐生市の発展に貢献された方々の事蹟を再認識しようとする思惑が強かった結果であろうと理解される。いわゆる審査の基本方針に捉えた第一の要点に起因するところである。そう考えたとき、今回の審査会では、いささか異なるものを感じた。「史跡の豊かな山里―鹿角の小集落」に評価が集ったことは、審査委員の評価意識に変化があってのことと受け止めている。開発と近代化を否定するものではないが、小じんまりとしたこの集落は昔日と変わらない風情を残している。それは穏やかで心に安らぎを与えている。また、この集落には明治の黎明期に日本の政治・経済に革命的影響を及ぼした２人の偉人が輩出され、それに縁りをもつ史跡が点在する。この二つの要素が調和した希有な趣きを呈していることに注目された審査委員の視点の当て方を歓迎する。多面的感触が楽しめるこの山里の集落に“来てよかった”“また行ってみたい”そんな風景地があることを郷土の桐生びとに発信されることを期待する。

（一般応募）

『新発見の一日』

審査委員　　宮城　登至雄

審査委員として２年目の今回の「２０１１わがまち風景賞」の入選候補案件の全９件を巡りました。最初に訪れた黒保根町下田沢鹿角の小集落は余りにも史跡に富む豊かな山里の小集落であったこととこの周辺について無知であったことに気付かされました。新井家一族から傑出した徘諧師、政治家、教育者、実業家が輩出されていたことはその功績を知るにつけ、この小さな集落のなかに日本の政治を動かし、又蚕糸産業の振興を群馬、いな日本を海外に展開された先駆者が居た事実に驚嘆しました。次に訪れた新里町関の小池家住宅は典型的な養蚕農家の形態を残す地域屈指の大型住宅で、当家には明治から伝わる家相図が現存するとのこと。当時の大農家が現存し新里の田園風情を醸し出しています。旧市内に入り、カトリック桐生教会、ウチヤマ洋菓子店と若宮ほか４件もそれぞれの歴史的バックグランドに富む推薦案件で審査に困る審査会でした。又旧市内エリアで３件の過日の被災状況を調査する事ができました。

（一般応募）

『桐生の歴史的自慢して、案内したい風景』

審査委員　　神山　勇

この度初めて大役の審査に参加させていただきありがとうございました。今回の全９件候補の中で、黒保根、新里の３点が何となく新鮮な感じを受けました。旧市内の毎度々での見なれた風景と違い、心の故郷感で観照いたしました。落ち着いた風景、特に「史跡の豊かな山里」鹿角の小集落日本の夜明けと言われた、明治維新、アメリカとの生糸貿易、信用第一に考えた商法で認められた新井領一郎屋敷跡、及び西町インターナショナルスクール分校など、ライシャワー駐日大使戦後処理で日本を救った。尚八と夫人が結婚前の昭和２０年５月から疎開生活した蔵など参考になりました。新里へ移動し、関の磨崖仏、珍しい仏様を拝む機会ありがとうございました。小池家住宅は大きな家、百年以上の歴史、養蚕時代の遺産を拝見審査に悩み歴史観で投票しました。群馬ＤＣへ向け、わがまち風景賞現地視察資料を活用します。

（一般応募）

『その頃を思いながら』

審査委員　　八染　和弘

初めて「わがまち風景賞」の審査に参加させていただいた。

「ファッションタウン桐生」については、聞いた事はあっても内容は良く知らず、「建物」や「まちづくり」にも全く素人であり、皆さんの熱意と知識に圧倒された現地視察と審査会であった。

良い「風景」が出来るには時間が必要であると思う。

現在の桐生は、残念ながら人口減少や産業衰退が著しい状況であるが、１９４７年前後は高崎よりも、前橋よりも人口が多く、群馬県内１番であった。

今回の候補にも年代を重ねた建造物が多く見られるが､ほとんどが本来の役目を終えている。それらの建造物を見るとき、沢山の人が働き、出入りしていた、最も輝いていた時代を思いながら見ていた。

今回の現地視察には黒保根地区１件と新里地区２件が含まれていた。桐生市内でも知らない場所、知らない建造物が多く、黒保根や新里は全く不案内であり、この様な機会に見て、話を聞く事が出来るのは本当にうれしく、楽しい。

また、３月１１日に発生した大地震では桐生地域の多くの建造物も被害を受けている。今回の視察では「震災状況の調査」も合わせて実施され、多くの専門家の説明をお聞き出来た事は大変勉強になった。

最後に、プロジェクトメンバー方々にお礼を申し上げ､「わがまち風景賞」が更なる「桐生のまちづくり」に貢献する事を期待しております。

（一般応募）

『歴史とロマンの鹿角小集落』

審査委員　　竹田　賢一

明治の黎明期に、鹿角の小集落から偉人や産業近代化の先駆者を輩出した集落をこの目で確かめたかった。戸数１９戸、人口４１人の現集落に踏み込むのには躊躇するが、今回「わがまち風景賞」の審査員として、現地視察の一員として参加し、現在の当主からも説明を聞くことが出来て有意義だった。水沼製糸場を建てた星野長太郎の実弟、新井領一郎が渡米に際して群馬県令（知事）楫取素彦のところへ挨拶に伺うと、その妻（吉田松陰の妹）が､「兄が果たせなかった渡米に、この刀を持っていってほしい」と手渡され、見事日米貿易の振興に寄与した話や、ハル・ライシャワー夫人が祖父の家に戦時中疎開していた蔵も現存していて、この集落は夢とロマンのあるところとして推薦致します。

（一般応募）

２．　審査経過

「２０１１わがまち風景賞」は、平成２３年２月末から４月中旬まで案件の募集を行った。

今回の募集チラシは、大正８年の桐生倶楽部上棟式の写真を全面に使用し、情緒を感じさせるものとなった。募集チラシを桐生市内各所に配布し、応募ポストは市内３か所（有鄰館、市民活動推進センターゆい、桐生商工会議所ロビー）に設置した。また、前回と同じく、桐生タイムス（３月１７日発行）にチラシを折り込み、多くの市民に対する本プロジェクトの周知に努めた。その結果、推薦・応募案件は、延べ３９案件にのぼった。

今年もプロジェクトチームが意見を集約し、現地視察会を行う案件を４月２３日に事前見学した。

また、今回は、３月１１日に発生した東日本大震災により特に大きな被害を受けた市内の建造物等の被災状況も調査し、例年とは一味違った風景賞となった。

審査委員会は５月７日（土）に開催され、はじめに現地視察を行った。午前８時に桐生商工会議所会館をバスが出発。審査委員１５人、プロジェクトメンバー９人、事務局３人を加えて、総勢２７人の参加となった。視察は黒保根町、新里町、旧市内から全９件で次のようなコースを回った。

①鹿角の小集落 ②関の磨崖仏 ③小池家住宅 ④カトリック桐生教会 ⑤ウチヤマ＆若宮
⑥旧住善織物工場 ⑦森合資会社 ⑧旧曽我織物工場 ⑨マルカツ＋中央商店街ビル群

当日は時折小雨が降るあいにくの天候であったが、それぞれの案件をじっくりと見ることができた。各審査委員のコメントを参照していただきたい。

現地視察では、普段はなかなか立ち入ることのできない建物内部を見学させてもらい、所有者からは家業の歴史や想い出話を伺うことができた。また、審査の途中に、織物参考館“紫”、旧平田商店、有鄰館等の被災状況も確認し、想像以上の被害の大きさに審査委員は一様に驚いていた。

視察後は、商工会議所に戻り入選案件の選出を行った。今年の入選候補全９件に対するそれぞれの思いや意見が活発に発表され、審査は白熱した。２度の投票の結果、「２０１１わがまち風景賞」５案件が選出された。